

東京大学駒場博物館秋季特別展 「第2回ふね遺産認定記念 大日本海志編纂資料展」 出陳一覧 解説：安達裕之							2018年12月2日版
会期：2018年10月20日（土）～12月2日（日）							
※資料番号に★が付いているものはデジタルアーカイブでご覧になれます							
東京大学駒場図書館デジタルアーカイブ「大日本海志編纂資料」 http://gazo.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/kaishi/							
展示概要「大日本海志編纂資料について」	<p>明治16年（1883）に農商務省駅通局から古来船舶制度調査事業を移管された海軍省は、海軍彙編・海防彙編・造船彙編・海運彙編・通商彙編より成る日本海志の編纂を企て、水軍・外交・海防・造船・海運・海外通商などに関わる資料の収集に鋭意努めました。しかし、日本海志の編纂はついに陽の目をみず、両省によって蒐集された資料は大日本海志編纂資料（以後、海志編纂資料と略称）として海軍文庫に収蔵されました。敗戦直後、海軍文庫の図書は海軍省から本郷の東京帝国大学に運ばれ、さらに昭和24年（1949）末から翌年初め頃に駒場の教養学部図書館に移されました。</p> <p>当時、駒場で図学の教鞭をとっていた須藤利一教授は日本造船史に造詣が深く、海軍文庫の到来を知ると、早速、調査を行い、海志編纂資料をはじめとする海事資料を図書館から研究室に借り出しました。須藤教授は往時を回顧して、「いままで実際に見たことがなかった船図や木割書や秘伝書をはじめ、多くの水軍書など、次々と出てきたときの喜びは、今、思い出しても狂喜といった状態だった」と語っています。以後、須藤研究室の資料は図学教室（現、情報・図形科学部会）で研究・閲覧の用に供されてきましたが、平成21年（2009）に駒場図書館へ移管されたのを機にデジタル化して公開の運びとなりました。史料編纂所に分蔵される数冊を除いて、若干の欠本はあるものの、敗戦直後の事情を考えれば、海志編纂資料がほぼ完全な形で今に伝えられたことは奇跡とあって、多くの関係者の尽力の賜です。</p> <p>海志編纂資料の特色は水軍書と木割書・図面などの造船関係資料が充実していることで、なかでも図面の9割を原本が占めることは特筆にあたいします。農商務省も海軍省も写本の作成を原則としており、海志編纂資料のほとんどは写本ですが、ごくまれに原本の提供を受けることがありました。図面の原本を提供したのは、海軍と関係の深い旧薩摩藩主島津家で、さすがに大藩だけあって、各種の船の図面が揃っており、他に類をみません。</p> <p>インターネット公開の始まった平成21年以降、駒場図書館は資料保存の観点から閲覧を停止していますが、本年7月に日本船舶海洋工学会から歴史的な価値のあるふね遺産（Ship Heritage）として認定されたのを記念して、海志編纂資料に駒場図書館の所蔵する参考資料を加えて展覧会を開催することにしました。展示ケースの関係から見事な図面をほとんどお見せできないのは心残りですが、司馬遼太郎『坂の上の雲』によれば「日露戦争中、東郷大将の知囊として、機略縦横、鬼才の名を恣にした」海軍作戦参謀秋山真之が戦術を練るのに参照した水軍書『能島流海賊古法』、造船の流派を代表する境流・瀬戸流・唐津流・伊予流の豪華な秘伝書、薩摩藩が仕様を決定するために作成した船ではごくまれな御座船の上廻りの起絵図、幕末の洋式船の絵図面など逸品を展示して日本の豊かな船の文化の一端をご覧に入れます。</p>						
テーマ	テーマ番号	資料番号	形態	資料名	年代・著作者・出典等	解説	所蔵者
導入	L00	01	画像	農商務省達 明治15年4月4日第8号府県	公文類聚第6編 明治15年 第53巻	駅通紀事編纂のため明治7年（1874）から駅通寮の蒐集した駅通志料が駅通局御用掛青江秀によって編纂され、明治15年3月に『駅通志稿』として上梓されると農商務省駅通局は、本格的な古来船舶制度の調査に乗り出し、府県に別紙目録の書類の借上と現品の絵図面の提出を命じた。	国立公文書館蔵
導入	L00	02	画像	農商務省達 明治16年6月6日第5号府県	公文類聚第7編 明治16年 第58巻	古来船舶制度の調査は、駅通局から海軍省へ移管された。移管に明治14年の政変により下野した農商務卿河野敏謙の後任たる西郷従道が関わった可能性を指摘する向きもある。当時の海軍卿川村純義と軍務局長伊東祐磨と西郷は同郷だからである。なお、『日本海志材料書籍目録』（国立公文書館内閣文庫所蔵）は駅通局の作成した写本の目録。	国立公文書館蔵

導入	L00	03	画像	日本海志編修ノ儀ニ付上申	明治16年普号通覧23	明治16年（1883）6月14日に軍務局長伊東祐磨は、5大編から成る日本海志の編修着手と志料蒐集のための府県への布達を海軍卿川村純義に願ひ出た。伊東は、日本海志を「海政ノ要典ニシテ」「海上一切ノ政事ヲ統記スルモノニシテ、既往将来ヲ鑑ミルノ龜鑑」と位置付けており、明らかに駅通局の古来船舶制度の調査とは性格を異にする。	防衛省防衛研究所蔵
導入	L00	04	画像	海軍歴史編修ノ体裁	明治16年普号通覧23	日本海志の詳細で、5大編23部から成る。海軍省が駅通局の蒐集した船舶関係史料の編纂事業を海軍独自の視角から引継ぐに相応しい構成と高く評価する向きもある。確かに海軍の独自色が濃いが、構想が雄大に過ぎて、構想倒れに終わった可能性は否めない。	防衛省防衛研究所蔵
導入	L00	05	画像	海軍省達 明治16年6月26日乙第8号府県	公文類聚第7編 明治16年第11巻	海軍省は、日本海志編成のため府県に別紙目録の書類・現品等の借上と提出を命じた。布達に先立って海軍省は、5月23日に農商務省を辞した『駅通志稿』の編纂者青江秀の御用掛採用を翌日に願ひ出て、5月30日に許された。なお、青江は明治19年2月に北海道庁理事官に転出、海志編纂事業は参謀本部に設置された編纂課に引き継がれた。	国立公文書館蔵
導入	L00	06	画像	須藤利一（1901-1975）	昭和42年（1967）10月、『異国船来琉記』（法政大学出版局、1974年）	東京帝国大学工学部船舶工学科卒。台北高等学校・第一高等学校・東京大学教養学部・日本大学で図学の教鞭をとる。造船史に造詣が深く、南島や沖縄のわらざんの研究でも有名。南島研究会・日本海事史学会・日本図学会の設立に参画、日本海事史学会副会長・日本図学会会長を歴任。著書に『南島覚書』『図学概論』『異国船来琉記』『沖縄の数学』等。	
テーマ	テーマ番号	資料番号	形態	資料名	年代・著制作者・出典等	解説	所蔵者
目録	L01	02	資料	海軍文庫図書分類目録		昭和7年（1932）10月1日現在の海軍文庫の目録で、大日本海志編纂資料は、「N、古書、珍籍」の「NS大日本海志編纂資料」として分類されている。	東京大学 工学・情報理工学図書館 工3号館図書室蔵
目録	L01	01	資料	大日本海志編纂資料目録		『海軍文庫図書分類目録（和漢書ノ部）』と比べると、部門の構成は同じながら、掲載の順序が違ったり、副本目録があったりするなど相違が目立ち、目録としてはまったくの別本。	東京大学駒場図書館蔵
目録	L01	03	資料	『日本海事史料目録』第1集	日本海事史学会編、昭和42年（1967）	海事史研究の発展のために、日本海事史学会が海運・法制・船舶・航海などに重点を置いて編纂した海事史料目録で、大日本海志編纂資料については歴史的意義を尊重して『大日本海志編纂資料目録』を翻刻。本書の刊行を契機として大日本海志編纂資料の存在が世に広く知られるに至った。	個人蔵

テーマ解説「大日本海志 編纂の顛末」	明治16年（1883）6月に海軍省は、日本海志編成のため府県に別紙目録の書類・現品等の借上と提出を命じ、関係書類の写本を作成する等、鋭意、編纂材料の蒐集に努めた。しかし、日本海志の編纂は遅々として進まなかったようで、明治19年3月に参考のために日本海志1部の分与を求めた通信省管船局に対し、海軍省は未だ脱稿の運びに至らずと回答している。詳しい経緯は不明であるが、結局、明治23年6月に日本海志編纂の中止が決まり、編纂材料として蒐集された資料の内、戦史編輯の材料として軍法・戦記・軍船図の類は海軍参謀部、航路図・水路誌の類は海軍水路部、『宥二造木割帳』外442点は管船局に下付された。なお、海軍が蒐集した資料の目録『海志材料目録』乾坤は今に伝わらない。						
テーマ	テーマ番号	資料番号	形態	資料名	年代・著作者・出典等	解説	所蔵者
大日本海志編纂の顛末	L02	1-01～12★	資料	駅通志料 船舶之部 巻1・巻3～巻13		駅通記事編纂のため明治7年（1874）から駅通寮が駅通志料を蒐集する過程で『駅通志料』43巻（通信総合博物館蔵）とその「船舶之部」13巻が編纂された。後に「船舶之部」は海軍省に移管。巻1から巻11は神代から幕末までの編年史料、巻12は雑纂、巻13は『和漢船用集』等の抄本。なお、巻2は海軍文庫から流失し、現在、神戸大学海事博物館蔵。	東京大学駒場図書館蔵
大日本海志編纂の顛末	L02	5-2-01★	海志	海志編纂資料		神武天皇から光孝天皇の仁和3年（887）までの日本海志に関わる編年史料で、1巻から6巻までを合冊。海軍省の野紙を用いた本書は、府県に借り上げさせた関係書類の写本を作成するばかりでなく、海軍省が独自に日本海志資料の蒐集に努めていたことを物語る。	東京大学駒場図書館蔵

テーマ解説「大日本海志 編纂資料蒐集の厚薄」	水軍書と軍船の図面の充実が大日本海志編纂資料の特徴の一つであることは、戦史編輯の材料として参謀部に下付された資料が大日本海志編纂資料の根幹をなす以上、何ら不思議はない。第四部門外交・海防の外交と漂流、第五部門史書雑纂の史書、第六部門地誌、第八部門雑は、参謀部・水路部・管船局の関心を惹かなかつた分野であり、海軍が蒐集した原状をとどめていると考えられるが、蒐集された資料は意外に少なく、貴重な資料は散見されるものの、水軍書と軍船の図面に比すれば貧弱の一言に尽きる。						
テーマ	テーマ番号	資料番号	形態	資料名	年代・著制作者・出典等	解説	所蔵者
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L03	01	図書	小笠原長生「水軍と海戦」	『鐵櫻漫談』（早稲田大学出版部、1928年）	「明治32年(1899)秋に胃腸病で入院中の秋山真之を見舞った私は、話に出た水軍に関する写本を見せることを約し、約束を果たした。以後、秋山は水軍の研究に没頭し、すこぶる熱心なので、私の所有する本をすべて提供して研究に資した。後年、秋山が日露戦争で戦術などに関し種々献策したなかに水軍の戦法の精神に則った点があると私は信じている。」	個人蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L03	02	図書	司馬遼太郎「十七夜」	『坂の上の雲』第2巻（文藝春秋社、1969年）	司馬はこう記す。「明治33年(1900)に米国から帰朝してほどなく胃腸を病んで入院中の秋山真之大尉を見舞った小笠原長生少佐は、頼まれた海賊戦法の本を旧臣等に尋ね、珍本『能島流海賊古法』を探し出して届けた。本書をむさぼり読んだ秋山は目が開かれたと何度も小笠原に言い、後に小笠原は日本海軍の戦術は秋山の入院中にできたと人に語った」と。	東京大学駒場図書館蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L03	03	図書	小笠原長生 『日本帝国海上権力史講義』	（春陽堂、1904年）	司馬の種本たる小笠原の回顧譚は本の出所を明かさず、ために小笠原が旧唐津藩当主であることに絡めて司馬は出所を潤色した。しかし、小笠原が秋山に草稿を見せ、海軍大学校から明治35年（1902）に刊行した『日本帝国海上権力史講義』第4章「中古ノ水軍」を一読すれば、典拠は海軍文庫の水軍書と知れる。小笠原が見せたのは海軍文庫本である。	個人蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L03	04	画像	小笠原長生（1867-1958）	大正3年（1914）、『小笠原長生と其随筆』（小笠原長生公九十歳祝賀記念刊行会、1956年）	子爵・海軍中將。唐津藩主小笠原長行の長男。鐵櫻は号の一つ。海軍大学校教官・海軍軍令部参謀・宮内省御用掛等を歴任。日清戦争・日露戦争に従軍。文筆に長じ、『海戦日録』『日本帝国海上権力史講義』『東郷元帥詳伝』『鐵櫻漫談』等多くの著書がある。「日露戦争中、東郷大将の智囊として、機略縦横、鬼才の名を恣にした」とは小笠原の秋山真之評。	
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L03	1-4-23★	海志	野島流海賊古法		司馬遼太郎によれば、秋山真之がむさぼり読んだという『能島流海賊古法』は珍本ではなく、広く流布した水軍書で、海軍文庫所蔵本は8冊を数える。本書の奥書には「岡山池田侯爵家所蔵原本ヲ寫」とある。農商務省駅通局が原本を旧岡山藩主池田章政から借用したのが明治15年（1882）、池田の叙爵は明治17年7月だから、写本を作成したのは海軍省。	東京大学駒場図書館蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L04	4-1-06～12★	海志	渡唐集 1～6・8		天文年間に大内義隆の対明貿易の使節となって2度、入明した嵯峨天龍寺妙智院の策彦周良関連の以下の史料の写し。(1)戊子入明記、(2)策彦和尚再渡集下、(3)菴和尚壬申入明記、(4)渡唐方進貢物諸色注文、(5)大明譜、(6)大明別幅并両国勘合、(8)策彦和尚初渡集下之上。日明貿易の史料としてきわめて貴重。	東京大学駒場図書館蔵

大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L04	4-1-21★	海志	異国御朱印帳		本書は、近世初頭、幕府が海外貿易に従事する日本船に発給した異国渡海朱印状の控えて、「異国渡海御朱印帳」「異国近年御書草案」「異国御朱印帳」より成る。臨濟禅僧金地院崇伝（本光国師）の筆録した原本は、京都南禅寺金地院の所蔵。朱印船貿易の研究に不可欠。	東京大学駒場図書館蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L05	6-0-11★	海志	指南広義		琉球が清朝に派遣する進貢船の那覇・福州間の航海に関連するさまざまな情報を程順則が編纂して、康熙47年（1708）に中国瓊海の福州琉球館（柔遠駅）で版行した航海術書。本書の「定更数之法」の定める1更＝60里は明・清代の中国船の航法の基本であり、「針路條記」を一読すれば、琉球の航海術が中国と何ら異なるところはないことが知れよう。	東京大学駒場図書館蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L05	6-0-08★	海志	八丈記		原本は、寛政9年（1797）の古川古松軒『八丈島筆記』の文久2年（1862）2月下旬の写本。伊豆諸島の地図に古松軒本にはない「是ヨリ南小笠原島有」の朱書があるのは、文久元年12月に幕府が外国奉行水野忠徳等を小笠原諸島開拓のため咸臨丸で派遣したことが写本制作者の念頭にあったからだろう。なお、水野の帰舟は文久2年3月。	東京大学駒場図書館蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L05	6-0-04★	海志	三国通覧図説		朝鮮・琉球・蝦夷地・無人島（小笠原諸島）についての林子平による天明6年（1786）刊行の地理書。裏表紙裏に「池田家第四拾貳紙」とある。農商務省駅通局が旧岡山藩主池田章政から借用したのが明治15年（1882）、明治17年6月25日に海軍省が稿本を作成した。現在、原本は岡山大学附属図書館蔵鴨方藩文庫に架蔵（資料番号R5-5）。	東京大学駒場図書館蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L06	7-3-01★	海志	源平合戦之図・六波羅御教書写		「源平合戦之図」の原本は、壇ノ浦の戦で入水した安徳天皇を祀る赤間神宮（山口県下関市）所蔵の「安徳天皇縁起絵図」8幅（伝土佐光信筆）。現在、掛幅となっているが、もとは赤間神宮の前身である阿弥陀寺の御影堂の障壁画。また「六波羅御教書写」の原本は、赤間神宮所蔵の旧阿弥陀寺文書である「赤間神宮文書」10巻1冊の巻2。	東京大学駒場図書館蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L06	01	図書	『赤間神宮宝物図録』	（赤間神宮、2012年）		個人蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L07	7-3-06★	海志	蒙古襲来之図		文永・弘安両度の元寇における肥後国御家人竹崎季長の武功を描く「蒙古襲来絵詞」は、明治23年（1890）に所有者である元熊本藩士大矢野家から明治天皇に献納されるまでに多くの模本が作成された。本図が大矢野家から絵巻を借りて写したか、模本を写したかは定かではない。	東京大学駒場図書館蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L07	721.2:Ko61:1978	図書	『蒙古襲来絵詞』	日本絵巻大成14（中央公論社、1978年）		東京大学駒場博物館蔵
大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L08	7-3-29★	海志	九鬼公釜山海船柵之図		朝鮮の役における九鬼嘉隆の水軍の活躍を描く本図は、安宅船であるにもかかわらず、嘉隆配下の九鬼藤四郎・青山豊前の2艘を関船に描くばかりでなく、肝心の日本丸を胴壁造りの総矢倉のという安宅船の上廻りとはかけ離れた姿で描くなど重大な誤りを犯しているため、安宅船の実態を知らない後世の作であることは明白である。	東京大学駒場図書館蔵

大日本海志編纂資料蒐集の厚薄	L08	7-3-32★	海志	武田氏軍艦雛形之図	甲斐の武田氏の遺臣が難波で小早川秀秋から水戦の法を授かった際、朝鮮を攻める軍船の「木形」を写した安宅船と関船の雛形（模型）を作り、信松尼（武田信玄の四女松姫）を開基とする信松院（東京都八王子市）に正徳4年（1715）に納めた。本図は安宅船で、小安宅船ながら、往時の胴壁造りの総矢倉がどのようなものがよくわかる。	東京大学駒場図書館蔵
----------------	-----	---------	----	-----------	---	------------

テーマ解説「秘伝書の世界」	江戸時代の大坂は、日本最大の造船地であり、軍船から商船まで各種の船が建造されていた。この地には川上家、将軍家御用船匠の境井家、瀬戸流の金沢家、伊予流の長谷川家、唐津流の串木家といった著名な船匠が顔をそろえ、大名の船大工棟梁は彼等に弟子入りして木割書と図面の伝授を受けた。木割書の伝授は秘伝とされ、一子相伝あるいは一国一人が原則である。一見、秘密主義のようであるが、実質的には流派による木割のさしたる相違はなく、また伝授を受けなければ船が造れないわけでもない。しかし、大名の船大工棟梁の資格として秘伝の伝授を必要とした場合があったことは確かで、代々土佐藩の船大工頭を勤めた岡家四代の四郎右衛門はその好例である。もとより、秘伝の伝授が物をいったのは大名の造船にかかわる世界だけであった。						
テーマ	テーマ番号	資料番号	形態	資料名	年代・著制作者・出典等	解説	所蔵者
秘伝書の世界	L09	7-1-02★	画像	許之状	宝暦元年（1751）11月	天辰助右衛門が弟子の福崎嘉藤左衛門に授けた関船の木割法の許状。この時、延宝3年（1675）5月に境井八郎右衛門から天辰助八郎が授かった秘伝書と図面一式が福崎に伝えられた。	東京大学駒場図書館蔵
秘伝書の世界	L09	7-1-03（18）★	海志	許之状	延宝3年（1675）5月	境井八郎右衛門が薩摩藩の天辰助八郎に授けた関船の木割法の許状。境井家は大阪で将軍家の御用船匠をつとめる名家で、父九郎兵衛の弟子の一人が薩摩藩の長崎源七左衛門である。許状の文言は木割書の巻末に付すのが一般的であるが、格式の高い境井家では別巻に仕立てており、天辰のように弟子が許状を出す時もそうしている。	東京大学駒場図書館蔵
秘伝書の世界	L09	7-1-04（15）★	海志	諸関船秘書	延宝3年（1675）5月	境井八郎右衛門が薩摩藩の天辰助八郎に授けた関船の木割書。格式が高いにしては、唐津流等他の流派に比して内容は貧弱である。伝授の図面に「伊勢船陣船」と「川御座船拾挺立」があるので、八郎左衛門は「川船・荷方・伊勢船秘書」も伝授したはずであるが、伝わらない。	東京大学駒場図書館蔵
秘伝書の世界	L10	7-1-05～08（13, 14, 16, 17）★	海志	祭文秘書 2巻、神道之大事 2巻	延宝3年（1675）5月	境井八郎右衛門が薩摩藩の天辰助八郎に授けた造船儀礼に関わる秘伝書。流派により多少の相違はあるが、主な造船儀礼は新始め・航据え・筒立て・船卸しで、船大工棟梁が儀礼を主導し、九字護身の法等を行い、船魂祭文等を読み上げた。	東京大学駒場図書館蔵
秘伝書の世界	L10	7-1-09～13★	画像	伊勢船陣船・住吉丸御召船七拾四挺立・関船六拾挺立・小早四拾挺立・川御座船拾挺立	延宝3年（1675）5月	境井八郎右衛門が薩摩藩の天辰助八郎に木割書とともに授けた図面。雲母引きの図面は他に類例をみない。八郎右衛門は荷船の図面も授けたはずであるが、今に伝わらない。	東京大学駒場図書館蔵
秘伝書の世界	L11	7-1-01（11）★	海志	船傳書		年代・伝来とも不明のごく簡単な寸法書で、立花の図が極彩色で入っているのは木割書・寸法書としては異例。石井謙治氏の研究によれば、最初の表題のない寸法書は推定20挺立小早の寸法書、「拾タン帆切符」は推定42挺立関船の寸法書、「千石舟之切符」は1000石積二形船の寸法書である。	東京大学駒場図書館蔵
秘伝書の世界	L11	2-01（12）★	図書	川御座船仕法書	宝暦7年（1757）秋	伊予流を称した長谷川孫兵衛が淡路屋猪右衛門に授けた川御座船の木割書。境井流の『川船・荷方・伊勢船秘書』や瀬戸流を称した金沢兼光・同徳左衛門が寛延4年（1751）に薩摩藩の船大工棟梁長崎金兵衛に授けた『川船法規矩』に比して内容が詳細であるばかりでなく、屋形の寸法書までそろっており、本書は川御座船の木割書の白眉といつてよい。	東京大学駒場図書館蔵

秘伝書の世界	L12	7-1-22~28 (4~10) ★	海志	関船之書物 卷2・3・6~10	延宝3年 (1675) 7月	唐津流を称した大坂の串木孫之丞が国性長右衛門に授けた関船の木割書で、10巻中、巻1・4・5を欠く。木割法の頂点を極めた木割書であるのみならず、木割書では類例のない装飾が施されており、巻2・3の巻頭には住吉太神、巻末には十一面観音像が描かれ、巻6~10の巻頭には梵字と「住吉太神宮」、巻末には梵字と「十一面観音」の墨書がある。	東京大学駒場図書館蔵
秘伝書の世界	L13	7-1-14 (3) ★	海志	諸関船秘書	享保9年 (1724) 11月	代々土佐藩の船大工頭を勤めた岡家四代目の四郎右衛門が津野久兵衛に授けた境井流の木割書。祖父が金沢家、父が境井八郎右衛門から秘伝を伝授されたのに、四代目が元禄7年 (1694) から八郎右衛門に3年間弟子入りして秘伝を授けられた後に船大工頭に任命されたのは、父の死後生まれたため、父から技術を継承していなかったからだろう。	東京大学駒場図書館蔵
秘伝書の世界	L13	7-1-15 (2) ★	海志	川船・荷方・伊勢船秘書	享保9年 (1724) 11月	土佐藩の岡四郎右衛門が津野久兵衛に授けた境井流の川御座船・弁才船・伊勢船の木割書。この古色蒼然たる木割書は、造船の名家からの秘伝の伝授という由緒が最重要であったことをうかがわせるにたる。なお、宝永4年 (1707) 10月の地震による津波で秘伝書一式を流失した四郎右衛門は、翌年4月に八郎右衛門から再交付を受けている。	東京大学駒場図書館蔵
秘伝書の世界	L13	7-1-16 (1) ★	海志	瀬戸流秘書	享保9年 (1724) 11月	土佐藩の岡四郎右衛門が津野久兵衛に授けた瀬戸流の関船と荷船の木割書。本書は寛文3年 (1663) 6月に四郎右衛門の祖父四郎右衛門が大坂の金沢太郎右衛門・金沢利左衛門に入門して授かったもので、当時、すでに時代遅れになっていた。大名の船大工棟梁の資格として、造船の名家からの秘伝書の伝授が最重要であったことをうかがわせる好例。	東京大学駒場図書館蔵
秘伝書の世界	L13	7-1-17~21★	画像	安武丸図・伊勢船図・関船図 七十挺立・関船図 五十挺立・荷船図	享保9年 (1724) 11月	岡四郎右衛門が津野久兵衛に木割書とともに授けた図面。岡は同時に早川市郎左衛門にも秘伝を授けており、「造船曲尺法許状之事」の「目録」によれば、津野に授けたはずの許状1巻と神霊祭文2巻と川御座船の図面1巻が今に伝わらない。なお、失われた図面は延宝3年 (1675) 5月に境井が天辰に授けた「川御座船拾挺立」と大同小異の可能性がある。	東京大学駒場図書館蔵

テーマ解説「武家の船」	幕府と大名は、関船から橋船まで大小様々な船を数多く持ち、とりわけ参勤交代に海路をとる西国大名は、大藩ともなれば、100～200艘を有することも珍しくない。大日本海志編纂資料の造船関係資料のほとんどは幕府・大名の船であり、特徴の一つとあってよい。しかし、明治23年（1890）6月に逓信省管船局に下付された『宥二造木割帳』が岡山藩の船匠次田家の所蔵する関船の木割書の写しであるところからすれば、管船局に下付された443点の資料に相当数の造船関係資料が含まれていたことは間違いなく、図面を別にすれば、あるいは大日本海志編纂資料を凌駕していたかもしれない。なお、管船局と海軍水路部に下付された資料が今に伝わらないのは、明治40年1月の火災で逓信省の庁舎が焼失し、大正12年（1923）9月の関東大震災で水路部の庁舎が全焼したからだろう。						
テーマ	テーマ番号	資料番号	形態	資料名	年代・著作者・出典等	解説	所蔵者
武家の船	R01	7-2-30★	海志	御召萬歳丸腹形		薩摩藩の御座船萬歳丸の上廻りの仕様を決定するために作られた起絵図。起絵図は船では珍しいが、薩摩藩は上廻りの仕様決定の常套手段としており、「御召住吉丸起シ絵図」「御召小鷹丸九反帆」「泰平丸起絵図」など多くの起絵図が今に伝わる。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R01	7-2-28★	画像	御召萬歳丸平形			東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R02	7-2-05★	海志	御召鯨船絵図平形	寛政3年（1791）	幕府・大名の鯨船は捕鯨用の獵船の制に倣って造られた船であり、快速を生かして御座船を曳航する漕船（引船）や使者船として用いられたが、本図には「御召」とあるので薩摩藩主用。御召鯨船としては安政4年（1857）9月に建造された阿波藩の千山丸が現存しており、徳島市立徳島城博物館（徳島県徳島市）に展示されている。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R03	7-3-45★	海志	安宅丸御船之図		安宅丸は、寛永8年（1631）に大御所徳川秀忠が向井将監に伊豆の伊東で造らせた大安宅船。将軍家光が天下丸と命名したが、俗に安宅丸（安宅船の汎称）と呼ばれた。船印は金の釣鐘。推定排水量は1700トン。未曾有の巨大さと豪華さにより江戸名物の一つと称えられた。天和2年（1682）解体。本図は、江戸城の富士見の宝蔵にあった模型の写生。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R04	01	画像	『御関船之記』	154-0171		国立公文書館内閣文庫蔵
武家の船	R04	3-2-12★	海志	御関船之記		幕府の安宅丸と天地丸以下15艘の関船の武器と船印の書上げと船印の雛形。安宅丸の金の釣鐘を日吉丸の船印とし、天地丸の金の槌を安宅丸の船印とするばかりでなく、奥書に名を連ねる5人の船手のうち松平彌九郎の任期が他の4人とまったく重ならないなどの明らかな誤りがあり、本書には信を置けない。原本は内閣文庫に架蔵（請求番号154-0171）。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R04	3-2-01★	海志	大住吉丸御造営日記		文政9年（1826）5月28日から翌年1月10日までの人吉藩の船大工棟梁長船惣次郎による御座船大住吉丸の作業日誌。作業日誌としては唯一無二。建造地は八代。家禄・家格によってさまざまな制約が加えられた大名の行列と違って、御座船には大きさの上限以外には制約はなく、人吉藩は石高わずか2万石余ながら、大住吉丸は阿波藩の至徳丸と同等。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R04	3-2-18★	海志	川御船四艘之模様書		幕府が大坂に置いた紀伊国丸以下4艘の川御座船の屋形の仕様書。淀川を上下する朝鮮通信使の迎接船として使用して、幕府の威信を内外に誇示するため、大坂の川御座船が大きさでも装飾の豪華さでも江戸の川御座船を超越していたことがよくわかる。金沢兼光はこう記す。「みな金銀珠玉をちりばめ、美をつくせり、其結構、言語にのべがたし」と。	東京大学駒場図書館蔵

武家の船	R04	02	画像	川御座船	金沢兼光『和漢船用集』巻第5(国文学研究資料館蔵)	金沢兼光は船名を記していないが、鯨を棟にのせる川御座船は紀伊国丸以外にはない。全長98尺(29.7m)、肩幅20尺(6.1m)、最大級の川御座船。川御座船の華麗さに朝鮮通信使は呆れ、明和元年(1764)に来日した趙巖は、一般の建造に万金を費やすのは無益の費えであり、それが大名の船とあっては小児輩の戯玩の具にすぎない、と切り捨てた。	国文学研究資料館蔵
武家の船	R04	3-1-19★	海志	中国川御座船法		年代・筆者とも不明。屋形内で使用する脇息・衣桁・机・文箱などの調度品の寸法を記入した略図と「中国御召川御座」の寸法書と寸法を記入した屋形略図から成る。屋形略図の寸法が長谷川孫兵衛の『川御座船仕法書』と一致するので、本書は伊予流の一書と知れる。川御座船の船内調度品の実態を明らかにしうるのは本書を描いて他にない。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R04	7-2-71~72★	画像	御召川御座船	宝暦3年(1753)4月	金沢貞友の手になる川御座船の図面。「大坂御座敷川御座惣大工」を自称するだけに、船体・屋形ともに見事に描かれている。全長88尺(26.6m)、肩幅14.5尺(4.4m)。西国大名は大坂に川御座船を置き、参勤交代時の淀川の上下に用いた。朝鮮通信使に加えて琉球使節の迎撃にも動員されるため、大名の船にもやはり絢爛たる装飾が施されていた。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R05	3-1-16★	海志	早船之規矩		熊本藩の船匠竹内家に伝わる4冊の関船の木割書(承応3年(1654)の「御早船造法」・寛文12年(1672)の「早船ノ秘法」・寛政3年(1791)の「早船ノ規矩」・慶応3年(1867)の「早船ノ木碎」)を竹内才記が4章仕立として一本にまとめて農商務省に提出した。とくに第3章に才記が「小伝」として付記した補足説明は重要。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R05	01	画像	竹内才記(1830-?)	『川尻町史』(川尻町役場、1935年)	熊本藩の船匠竹内家の分家の末裔。天保元年(1830)生れ、熊本藩船匠として長崎海軍伝習に参加、病気による辞職の期間をはさんで明治2(1869)年から明治4年まで軍艦河内丸・龍驤艦で「機関長兼大工頭」を務めた後、造船局に転じ、明治7年に海軍一等士官をもって辞職。	
武家の船	R05	3-2-20★	海志	関船製造法律並ニ御船魂祭文	明治16年(1883)3月	竹内才記は、「関船製造法律」で造船地の選定から船卸しまでの建造工程を解説し、「御船魂祭文」で造船儀礼のなかで最も重要な箇立て祝いの手順を述べるとともに、竹内家秘蔵の儀式で唱える船魂祭文と船魂儀軌を翻刻している。建造工程の解説は他に類例をみない。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R05	3-2-21★	海志	和洋船艦損益備考論	明治16年(1883)3月	竹内才記による日本船と西洋船の得失論。船型を泰宝丸に倣い、上廻りを洋式とし、20馬力の蒸気機関を搭載した船を10年で200艘建造して、治乱兼用とするという才記の建議は、幕末の大船主義者の主張を思わせるところがあって興味深い。船型を和式、構造を洋式として発動機を搭載した漁船がおおよそ40年後に出現する。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R05	7-2-64(2/18)★	画像	泰宝丸側面全図四十分一		泰宝丸は熊本藩の御座船であり、竹内才記が『和洋船艦損益備考論』で日本船の例としたのはこの船である。図面は才記の手になるが、「四十分一」は「二十分一」が正しい。	東京大学駒場図書館蔵

武家の船	R06	5-2-19★	海志	御船数並浦船数留帳	文政12年（1829）6月	岡山藩による藩と藩内の船数の調査書。農商務省駅通局が明治15年（1882）に旧岡山藩主池田章政から原本を借用して、明治16年（1883）3月27日に写本を作成した。現在、原本は岡山大学附属図書館蔵池田家文庫に架蔵されている（資料番号Y1-118）。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R06	3-1-14★	海志	早船木割帳		岡山藩の船匠次田家の関船の木割書。明治15年（1882）に農商務省駅通局が旧岡山藩主池田章政の紹介によって次田延守から原本を借用して、写本を作成、原本は海軍省から明治18年2月に返却された。現在、原本は岡山大学附属図書館蔵鴨方藩文庫に架蔵されている（資料番号N2-28）。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R06	7-2-65★	海志	日吉丸・神田丸・飛龍丸・小早・急小早寸尺		関船の日吉丸・神田丸・飛龍丸と8挺立小早・急小早の詳細な寸法書。本書を元柳川藩の船匠芳司孫平が作成して明治17年（1884）5月18日に海軍省に提出したことは、昭和41年（1966）11月の石井謙治氏による芳司家文書の調査で初めて判明した。なお、本書の附図11枚は伝存しない。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R06	3-1-12★	海志	早船木割之事	元禄3年（1690）8月	唐津流を称した大坂の串木氏春が茂兵衛に授けた関船の木割の秘伝書で、上下から成る。上に当たる本書は早くに流失し、下のみが昭和6年（1931）刊行の『海事史料叢書』第19巻に翻刻された。ところが、昭和40年に石井謙治氏がたまたま神田の古書店で本書を発見、入手され、駒場図書館に寄贈された。このような流失本は珍しくない。	東京大学駒場図書館蔵
武家の船	R06	01	画像	石井謙治（1917-2016）	昭和62年（1987）頃	造船史研究の第一人者。処女作『日本の船』（東京創元社、1957年）は、考古資料・絵画資料・文献を博搜して中世の船の構造を初めて明らかにし、古代から近世までの船の変遷を跡づけた造船史の一大金字塔。本書の出版により須藤利一教授の知遇をえて、大日本海志編纂資料の自由な閲覧を許され、以後、日本造船史の研究に本格的に取り組んだ。	

テーマ	テーマ番号	資料番号	形態	資料名	年代・著作者・出典等	解説	所蔵者
テーマ解説「商人の船」						幕府の鎖国政策の結果、日本船の海外渡航は跡絶えたが、強力な統一政権下、国内海運は飛躍的な発展をとげ、西廻り・東廻り両航路によって膨大な量の商品が廻漕されるとともに、河川の開墾も盛んに行われ、淀川・利根川・信濃川などの大河川はもちろん、今日では思いもよらぬ小河川にまで川船の往来する姿が見られた。全国が水運網でおおわれた江戸時代は、まさに水運の時代といってよい。ところが、案に相違して大日本海志編纂資料の商船に関わる資料は乏しい限りで、一桁にとどまる。海軍が蒐集した資料の目録『海志材料目録』が今に伝わらないので確言はできないが、あるいは管船局に下付された資料に商船関係の資料が含まれていた可能性はなくはない。	
商人の船	R07	2-05★	資料	ヘサイ造廻船		近世海運の主力商船として活躍した弁才船、いわゆる千石船の見分け方や仕建方、船道具に精通することを目的とした説明図。垣立下部の菱組の格子から、木綿・油・醤油・紙・薬酒などの日用品を大坂から江戸に積み下った菱垣廻船と知れる。一見、雑な絵に見えるが、艫を菱垣廻船に多い角艫に描くなど菱垣廻船の特徴をよく捉えている。	東京大学駒場図書館蔵
商人の船	R07	2-03 01～03★	画像	凡千石積二十分一之図	寛政5年（1793）6月	弁才船の見分け方や仕建方、船道具に精通することを目的とした説明図。画工は大坂蛭子島住の船匠淡路屋長右衛門。上棚の矧目を強調して描いたせいか、深さが木割から1割強も外れて深く、船の図面としては問題があるが、弁才船が櫓を完全に捨てる直前の艫矢倉内の構造のわかる図面として貴重。	東京大学駒場図書館蔵
商人の船	R08	7-3-50★	海志	造船明細図		明治元年（1868）から明治16年3月30日までの「和洋航海荷船并ニ各種造船明細図」と「船具同断」についての愛媛県による報告書。ヤツコ造・ナガサガリ・ホ・リアゲ・チヨキ・マギリ船・イサバ・上荷船・間屋デンマ・漁船の9図で、ヤツコ造・イサバ・上荷船には道具の図が付く。なお、マギリ船は「窓図」つまり誤った図として抹消。	東京大学駒場図書館蔵
商人の船	R08	7-3-50(5/9)★	画像	マギリ船		マギリ船とは、間切り走り中、つまり逆風帆走中の船を意味する。風は右舷船首寄りから吹いている。この図が「窓図」である所以は二つ、帆の裾に付けた帆足の取り方と帆桁の両端に付けた手縄の取り方が間違っていることである。	東京大学駒場図書館蔵
商人の船	R08	01	画像	明治21年（1888）の1500石積弁才船	F.E.Paris, Souvenirs de Marine, vol.6. Gauthier-Villars, Paris, 1908.	風は左舷船首寄り。帆の裾に付けた帆足と帆桁の両端に付けた手縄の取り方に注意。船首寄りの風で帆走する場合、帆足は、風上側を大渡、風下側を背廻に取り、一方、手縄は、帆が風に対して適当な角度を保つように風下側を引き、風上側をゆるめる。	
商人の船	R08	5-2-20～21★	海志	群馬県船舶取調帳 上・下		群馬県は県下の町村に古来船舶制度の取調べを命じたが、調査項目で該当するのは川船と船具しかなかったため、はからずも本書は明治15年と翌年の群馬県の川船と船具の貴重な調査記録となった。福島県令三島通庸に提出した東蒲原郡の津川町と五十島村・岩津村の調査報告書をまとめた『古来船舶調書』も同様。	東京大学駒場図書館蔵
商人の船	R09	7-3-58★	海志	唐船之図（南京船・寧波船）		長崎に来航した11艘の中国船と1艘の蘭船を描く平戸の松浦歴史博物館所蔵の「唐船之図」が原図。大庭脩氏の研究によれば、平戸藩主松浦篤信が享保5年（1720）頃に将軍吉宗の下問に答えるために制作させたという。実際に入港した中国船を描いたとすれば、制作年は上がっても享保5年、下っても享保7年。原図にある書込みがなく、本図は未完。	東京大学駒場図書館蔵

商人の船	R09	01	図書	図 II-7 18世紀前期の寧波船	『日本の船 和船編』（船の科学館、1998年）	個人蔵
------	-----	----	----	-------------------	-------------------------	-----

テーマ解説「近代造船の曙」	ペリー艦隊来航後の嘉永6年(1853)9月に幕府は大船建造禁止令を解き、対外的な軍事力の増強のために西欧の有用な技術を積極的に導入する政策に転じた。これが日本における造船の西欧化の端緒であり、海軍が日本海志の編纂を志すわずか30年前のことであるから、数多くの関係資料が残っていたことは想像にかたくない。たとえば、明治7年(1874)からおおよそ10年をかけて外務省記録局の編纂した『続通信全覧』には造船の西欧化を主導した幕府に関する資料が収められている。にもかかわらず、大日本海志編纂資料には造船の西欧化関係の資料は数えるほどしかない。あるいは、草創期の造船の西欧化は海軍の眼中になかったかもしれない。						
テーマ	テーマ番号	資料番号	形態	資料名	年代・著作者・出典等	解説	所蔵者
近代造船の曙	R10	3-3-02★	海志	七種軍艦造法論		幕末に普及をみた2種の翻訳造船書の一つで、唯一の専門書。翻訳者・翻訳年ともに未詳。7種類の軍艦について論じた魯般斯般度列窟突の1757年刊行の蘭書が底本。時代遅れになっていたにもかかわらず、幕末に本書がなお通用した理由は洋式造船書の入手難の一言に尽きる。別名、『西洋軍艦造法論』。なお、ほとんどの写本が附図8枚を欠く。	東京大学駒場図書館蔵
近代造船の曙	R10	01	資料	L. van Zwijndrecht, Verhandeling van den Hollandschen Scheepsbouw.		『七種軍艦造法論』の底本。書込みから蘭学者が所持していたことは間違いないが、内表紙の蔵書印が切り取られているため、特定できない。かつて佐賀藩が所持していた本は伝存しない。目下のところ、工3号館図書室本が唯一の伝本。	東京大学 工学・情報理工学図書館 工3号館図書室蔵
近代造船の曙	R10	3-3-01★	海志	製造伝習聞書抜書		安政2年(1855)から安政6年まで2次にわたって蘭教官団による海軍伝習が長崎で行われた。幕府は伝習生を3次にわたって派遣し、また幕府が樞要の地の海防を担当する大名の家臣の参加を許したこともあって、佐賀藩・福岡藩・薩摩藩・熊本藩などから派遣された藩士も多数にのぼる。本書は、第二次海軍伝習における造船の講義録。教官はトロイエン。	東京大学駒場図書館蔵
近代造船の曙	R10	7-2-81★	海志	西洋形船散図		本書は第二次海軍伝習における船員の講義録。筆録したのは薩摩藩士。教官はカッティンディーケ。	東京大学駒場図書館蔵
近代造船の曙	R11	7-2-55(86/93)★	海志	川蒸気艇の平面図		嘉永6年(1853)発注の蒸気船雛形(模型)として翌年に蘭商館長は幕府に川蒸気艇を引き渡した。ために実船であるのに、この艇は雛形と呼ばれ、蘭艦長ファビウスにより短期間行われた海軍伝習に参加した佐賀・薩摩などの藩士が試乗した。本図は、雛形とともに将来された川蒸気艇の側面図の薩摩藩士による写し。他に平面図と汽罐の図がある。	東京大学駒場図書館蔵
近代造船の曙	R12	7-2-82(7/33)★	海志	造船蘭書の附図の写し		第一次海軍伝習における造船の講義は、オブレーンの造船書(H. A. van der Speck Obreen, Verhandeling over de Zamenstellingen het Verband der Zeilschepen, 1842.)を主とし、レーキの造船書(J. C. Rijk, Handleiding tot de Kennis van den Scheepsbouw, 1822.)を従として行われたという。本図は、薩摩藩士によるオブレーンの造船書の附図第6図の写し。	東京大学駒場図書館蔵
近代造船の曙	R12	01	資料	Plaat VI.		Platen, Behoorende bij Werk Verhandeling over de Zamenstelling en het Verband der Zeilschepen 1843. 12図から成るオブレーンの造船書の附図の第6図。	個人蔵

近代造船の曙	R13	7-3-68★	海志	明治維新当時諸藩艦船図		嘉永6年（1853）9月に大船建造禁止令を解禁して洋式船建造の扉を開いた幕府は、翌年7月に日本惣船印は白地日の丸とし、藩船には各家の定めた船印・帆印の使用を命じ、さらに安政6年（1859）1月に帆は白帆とし、藩船には各家の定めた船印の中帆柱掲揚を下命した。いずれの場合も幕府は大名に雛形を提出させている。本図はその雛形の縮図。	東京大学駒場図書館蔵
近代造船の曙	R13	01	資料	仙台藩開成丸図巻		開成丸は、安政元年（1854）に長崎で短期間行われた蘭艦長ファビウスによる海軍伝習に幕府から派遣された江戸の陶工三浦乾也を仙台藩が招聘して、安政3年に松島湾内の寒風沢で建造したスクーター。8月に起工、翌年7月に進水し、11月に完成、12月には試験航海を行った。進水法からすると建造には戸田の船大工が加わっていたようである。	個人蔵
近代造船の曙	R14	7-3-67★	海志	文久三年亥七月 鹿児島湾英艦戦争之図		英艦隊が鹿児島湾内で泊地を移動した文久3年（1863）6月29日から損傷した英艦が鹿児島湾を退去する7月8日までの薩英戦争を描いた絵巻。文久3年冬に戦争に参加した藩士から実況を聞き取り、薩摩藩が作成。明治20年（1887）に宗家島津家の所蔵する本図巻を天皇・皇后の閲覧に供する際、市来廣貴が砲台名・地名の類いを書き加えた。	東京大学駒場図書館蔵